

付加価値を創る様々な視点 ～経済、社会活動の歴史的洞察から～

元トヨタファイナンシャルサービス（株）執行役員の菱川氏

火曜午餐会・5月第2例会は21日12時15分から当部5階大会議室で開催した。講師に元トヨタファイナンシャルサービス（株）執行役員の菱川善嗣氏を招き「付加価値を創る様々な視点～経済、社会活動の歴史的洞察から～」をテーマに語って頂いた。菱川氏は、人間が目指す社会について「人間と人間社会の為に常識とは異なる多様な視点から付加価値を創り、努力と忍耐が報われる社会であってほしい」と語った。講演要旨は次の通り。

人間が目指す社会は、人間と人間社会の為に付加価値を創り、努力と忍耐が報われる社会であってほしい。

将来に展望がある人間社会は、失敗しても努力を続ける人々や、豊かさを実感できた人々が多い。そして、生き甲斐を感じる人間性豊かな個性のある人々が多い社会であるということ。

そうでない人間社会は、格差が拡大し、世代間の継承が続く階層化社会が進み、利己的では無い多様な個性や、人間性という価値観が乏しい。そして社会構造の組織規模の拡大化が進み、中小規模ではなく、大規模組織が中心になっ

てしまう。さらに国や行政という権力組織の中央集権化の進行により、国民や市民の生活基盤である地域や地方の活力が弱っていく社会だと言える。

ですから、常識とは異なる多様な視点や価値観に気づき、その共感を広げて付加価値を創りだしていくことが大切。

公正なルールの不備

付加価値量に対して少ない報酬量ならば、社会貢献をしていることになる。しかし、人為的に社会構造を作り利用すれば、それは搾取。報われる社会にするには、格

差拡大の歪みを是正する意思と能力が必要である。

工夫を重ねて努力し、付加価値を創る人間が報われるためには、公正な競争ルールを時代の変化に応じて改善していかなければ実現しない。

人間社会の生存競争では、支配、被支配の社会構造を作り出した人間と、その組織が権力を帯び志向拡大すれば、他者の命、財、名誉、そして生き甲斐など規模力に応じて搾取することになる。ですから、公正な競争ルールを考えることが付加価値を創ることになる。

努力が報われない構造

財政赤字の長期化と拡大は、消費税導入後も悪化し続け、昨年は一千兆円を超えた。内需の活力を奪う悪循環の政策が成長失速を長期化。そして、企業の大規模化と意図的な指標による見せかけの戦後最長の好景気の演出により、一人当たりのGDPの下降が止まらない。

そして中央組織の力による産業、地方への介入があり、税と歪みのルールの施策としての官民一体や産学官連携は、むしろ評価と責任を曖昧にし、良心の呵責も希薄化し悪循環になっている。

権力を運びやすい組織

権力を運びやすい組織や機能を知り、法的思考能力を開発することは、多くの日本人にとって、他の先進国と比べて苦手な分野だと言える。

三権は法治国家なのか、法治社会なのか。立法の実態は中央官庁と官僚で、議員との関係は憲法の

主旨と乖離している。政策の誤謬を正す署名捺印がある直接請求が日の目を見た事例はほとんどない。憲法15条には「公務員を選定し、これを罷免することは国民の固有の権利である」とあるが、作動したことはなく、これが日本の法治国家の実態です。

そして大規模法人を律する法整備が大幅に遅れている。人は、罪と罰は細部まで歴史を反映し強化され、権力が介入しない限り因果応報に近いものがある。これに対して法人は、罪と罰は大まかで歴史は浅く粗雑。そして権力が介入しやすく、因果応報からは遠い。

最近よく聞く「ハラスメント」。芸能人や著名人などを使い、マスコミが世論と称して代替審判する。代替なので責任はないが、法治社会は当事者と法律のプロによる当事者主義と三審制が基本。その場にいなかった人たちが、原因を作った人よりも、怒りを出した人にネガティブな評価を与えることが常なること。日本では、組織ではなく個人を排斥する機能として定着している。

中立性、客観性という濾過装置機能は、国民に対しての無害の仮面だが、高い受容性の国民には大きな影響力を持つ。一方で権力に対して抗えない自己弁護のフィルターでもある。欧米の歴史認識の違いは、米大統領もマスコミを権力として使えず、自分でツイッターを活用している。そ

して国民もマスコミを鵜呑みしない実情がある。

日本文化、国民性

高い受容性が生む、無常観と抑制がある。これは、理不尽さ、喪失感のなかで、それでも人間は生きていく世の中がある。

庭文化は、禅宗の枯山水の石庭で、この世を表現している。釈迦の仏教は、本来自然そのもの。自然の生命体を人為的に極小化する盆、坪庭と言われる家庭菜園は、外ではなく内に向き、縮め小さくする志向。時代は変わるも、その根底は変わらない世の不合理、理不尽さに対し、無常と諦念しつつも諦めきれない生き甲斐を、その小さな世界に精一杯詰め込む思考とも言える。

公園という場の空間は、井戸端会議の踏襲で、公の場は花見、盆踊りなど画一的な催し以外に、日常では訪れないインフラ。これに対して、西欧では常時訪れる生活空間の一部で、各自の人間性と公共性が出会う場でもあり、日常の空間で自然に近づく場である。

紋と扇子は、東アジアでは日本独特のもの。天皇、大名、そして庶民まで紋を持つのは、必ず組織に属し個性ある個人ではなく、組織秩序に沿う言動を精神基盤にまで伝統として持つ。一方、扇子というのは儀式儀礼の象徴で、僧侶、能、茶道、そして葬儀まで使う。また、歴史的な日本社会の秩序が作った日本語の1、2人称の多さは、世界に例を見ない。

